

2026年6月19日(金)**イブニングセッション**

17:00～18:00 | 第1会場（ウイंकあいち 2F 大ホール）

イブニングセッション1 臨床研究を設計する：支援の連鎖が生む成功の条件

コーディネーター：下村 侑司（岡山大）

[ES1-1] 臨床研究を設計する：支援の連鎖が生む成功の条件

*下村 侑司¹ (1. 岡山大学学術研究院医療開発領域新医療研究開発センター)

[ES1-2] イブニングセッション1

*稲用 友佳¹ (1. 東京科学大学大学院 咬合機能健康科学分野)

[ES1-3] イブニングセッション1

*豆野 智昭¹ (1. 大阪大学大学院歯学研究科 有床義歯補綴学・高齢者歯科学講座)**イブニングセッション**

17:00～18:00 | 第2会場（ウイंकあいち 6F 展示場604+605）

イブニングセッション2 デジタル技術を基盤とした補綴歯科治療テクニック～繋ごう、症例報告へ～

コーディネーター：近藤 威（東北大）

[ES2-1] イブニングセッション2

*岩内 洋太郎¹ (1. 昭和医科大学歯学部 歯科補綴学講座)[ES2-2] デジタル技術を基盤とした補綴歯科治療テクニック
～繋ごう、症例報告へ～*近藤 威¹、*今井 実喜生²、*岩内 洋太郎³ (1. 東北大学大学院歯学研究科、2. 九州大学歯学研究院、3. 昭和医科大学歯学部)

[ES2-3] イブニングセッション2

*今井 実喜生^{1,2} (1. リベ大デンタルクリニック、2. 九州大学)**イブニングセッション**

17:00～18:00 | 第3会場（ウイंकあいち 5F 小ホール1）

イブニングセッション3 咬合が支える身体機能－ライフコース（小児・青年・高齢期）の視点から－

コーディネーター：大木 郷資（九州大）

[ES3-1] イブニングセッション3

*田邊 元¹ (1. 明海大学 歯学部 スポーツ歯学分野)

[ES3-2] イブニングセッション3

*芳賀 秀郷^{1,2,3} (1. 昭和医科大学歯学部歯科矯正学講座、2. 昭和医科大学スポーツ運動科学研究所、3. 昭和医科大学歯科病院 スポーツ歯科外来)

[ES3-3] 咬合が支える身体機能－ライフコース（小児・青年・高齢期）の視点から－

*大木 郷資¹、*田邊 元²、*芳賀 秀郷³ (1. 九州大学歯学研究院口腔機能修復学講座クラウンブリッジ補綴学分野、2. 明海大学 スポーツ歯学分野、3. 昭和医科大学 歯学部歯科矯正学講座)

イブニングセッション

17:00 ~ 18:00 | 第4会場 (ウインクあいち 5F 小ホール2)

イブニングセッション4 検証する！ドイツRBFDPsは次世代の補綴装置となり得るのか？

コーディネーター：大川 友成（九州大）

[ES4-1] イブニングセッション4

*長嶺 憲作¹ (1. 東北・北海道支部)

[ES4-2] イブニングセッション4

*寺尾 陽一¹ (1. 東海支部)

[ES4-3] イブニングセッション4

*森 圭右¹ (1. 東海支部)

イブニングセッション**■ 2026年6月19日(金) 17:00 ~ 18:00 | 会場 第1会場 (ウインクあいち 2F 大ホール)****イブニングセッション1 臨床研究を設計する：支援の連鎖が生む成功の条件**

コーディネーター：下村 侑司（岡山大）

近年、臨床研究の質に対する社会的要請の高まりを背景に、研究デザインの妥当性やデータ管理・解析の適切性がこれまで以上に重視されている。歯科医師は日常診療を通じて多くの研究課題を見出す一方で、臨床疑問をどのように研究として成立させるかを体系的に学ぶ機会は必ずしも多くない。

本セッションでは「支援」という視点から臨床研究を捉え、研究支援部門による研究構築の考え方、研究支援を受けながら研究を進めた経験、さらに大学院生を支援する立場からの実践例を共有する。臨床研究を支える多様な支援のあり方について議論する。

[ES1-1] 臨床研究を設計する：支援の連鎖が生む成功の条件***下村 侑司¹ (1. 岡山大学学術研究院医療開発領域新医療研究開発センター)****[ES1-2] イブニングセッション1*****稲用 友佳¹ (1. 東京科学大学大学院 咬合機能健康科学分野)****[ES1-3] イブニングセッション1*****豆野 智昭¹ (1. 大阪大学大学院歯学研究科 有床義歯補綴学・高齢者歯科学講座)**

イブニングセッション

2026年6月19日(金) 17:00 ~ 18:00 | 第1会場 (ウイंकあいち 2F 大ホール)

イブニングセッション1 臨床研究を設計する：支援の連鎖が生む成功の条件

コーディネーター：下村 侑司（岡山大）

| [ES1-1] 臨床研究を設計する：支援の連鎖が生む成功の条件

*下村 侑司¹ (1. 岡山大学学術研究院医療開発領域新医療研究開発センター)

キーワード：臨床疫学、研究デザイン、臨床研究支援

臨床研究を成立させるためには、臨床疑問を研究課題として整理し、研究デザインを構築する過程が不可欠である。しかし、研究課題の設定、倫理審査への対応、データ管理や解析計画の策定など、臨床研究には多くの段階が存在し、これらは臨床医にとって必ずしも日常的に経験するものではない。そのため研究を進める過程では、研究者個人の努力のみで解決することが難しい課題も多く、研究を支える支援体制の存在が研究の質や実現可能性に大きく関わると考えられる。

岡山大学学術研究院医療開発領域新医療研究開発センターは、臨床研究中核病院および橋渡し研究拠点として、治験や臨床研究の推進・支援を担っている。研究支援の現場では、臨床疑問を研究課題として整理する段階から、研究デザインの検討、データ収集方法の設計、解析計画の立案に至るまで、多様な支援が求められる。特に研究計画段階での検討は、研究の実現可能性や結果の解釈に大きく影響する重要な過程である。

本講演では、同センターに所属する立場から、臨床疑問を研究へと発展させる際の思考過程や研究デザイン段階での支援の実際について紹介し、後の2名の演者におつなぎする。研究支援の現場で経験してきた課題や工夫を共有し、臨床医主導研究をより実践的かつ再現性の高いものとするために、研究者を支える支援の役割について考える機会としたい。

イブニングセッション

2026年6月19日(金) 17:00 ~ 18:00 | 第1会場 (ウインクあいち 2F 大ホール)

イブニングセッション1 臨床研究を設計する：支援の連鎖が生む成功の条件

コーディネーター：下村 脩司 (岡山大)

[ES1-2] イブニングセッション1

*稲用 友佳¹ (1. 東京科学大学大学院 咬合機能健康科学分野)

臨床現場で見いだされたクリニカルクエスチョンを、臨床研究の形で明らかにしエビデンスとして還元することは、大学病院に勤務する研究者の重要な役割である。臨床研究には観察研究と介入研究があり、目的と実行可能性を踏まえた適切なデザインの選択が不可欠である。特にランダム化比較研究では、研究立案から申請、実施、解析、論文受理に至るまで多くのハードルが存在する。

本セッションでは、東京科学大学義歯科と東京歯科大学補綴科が実施する「有床義歯のリラインにおける操作性・耐久性に関する、常温重合型材料と光重合型材料の無作為化比較研究」(jRCTs032250051) を例に、研究支援を受ける立場から得られた経験を紹介する。本研究は特定臨床研究に該当し、研究支援部門と協働しながら、申請書作成、統計相談、データ管理システム構築、CRB申請準備を進めた。その中で研究計画段階での論理の明確化が研究全体の質と再現性を大きく左右することを体感した。

研究計画書の作成は一見負担が大きいように感じられるが、支援を受けながら丁寧にブラッシュアップすることで、倫理審査通過後の運用上の迷いや判断の揺らぎがなくなり、研究遂行上の安心材料として機能する。また、アウトカムの定義やバイアスへの配慮といった初期段階の検討が、効果的なポイントであることも学んだ。こうした経験を通して、若手臨床医が臨床疑問を研究へと発展させる際に、研究支援をどのように活用できるのかを具体的に示し、研究の実現可能性と質を高めるための視点を共有したい。

イブニングセッション

2026年6月19日(金) 17:00 ~ 18:00 | 第1会場 (ウイंकあいち 2F 大ホール)

イブニングセッション1 臨床研究を設計する：支援の連鎖が生む成功の条件

コーディネーター：下村 脩司 (岡山大)

[ES1-3] イブニングセッション1

*豆野 智昭¹ (1. 大阪大学大学院歯学研究科 有床義歯補綴学・高齢者歯科学講座)

臨床の現場で生じる疑問は、データを介して検証されることでエビデンスへと発展し、再び診療に還元される。この臨床研究のプロセスには、臨床家ならではの実感を伴う面白さがある。一方で、臨床研究は常にバイアスの制約下であり、倫理的・時間的・費用的な制限のもとで理想的な研究デザインを構築できることは稀である。選択バイアス、情報バイアス、交絡といった問題をいかに認識し、適切に対処するかが研究の質を大きく左右する。

こうした制約下で鍵となるのが、解析以前の段階、すなわちデータ設計における思考である。アウトカムの定義、交絡因子の選定といった事項は、本来すべて計画段階で検討しておくべきものであり、それらに基づいて解析方法を事前に規定することが望ましい。しかし現実には、設計段階の見落としに気づくのは往々にしてデータ収集後、すなわち解析段階である。近年、多様な情報をデータ化できるようになったことで調査の自由度は増したものの、だからこそ計画段階で「何を、なぜ、どこまで収集するのか」を吟味する重要性はいっそう高まっている。

本講演では、大学院生の臨床研究を支援する立場から経験してきた失敗と成功、そこから得られた実践的な気づきを率直に共有する。臨床の現場で生まれた疑問を研究として成立させるための、現実的かつ再現可能な視点を、若手歯科医師とともに考える場としたい。

イブニングセッション

■ 2026年6月19日(金) 17:00～18:00 | Ⅱ 第2会場（ウインクあいち 6F 展示場604+605）

イブニングセッション2 デジタル技術を基盤とした補綴歯科治療テクニック～繋ごう、症例報告へ～

コーディネーター：近藤 威（東北大）

近年、デジタル技術を用いた新たな補綴歯科治療技術が次々と報告されている。これらの多くは、欧米から発信されており、日本人は海外のエビデンスや臨床報告に学ぶ機会が多いのが現状である。一方、日本においても独自の臨床的工夫や新規性の高い技術的アイディアが数多く蓄積されている。本セッションでは、我々が実践しているデジタル技術を活用した多様な補綴歯科治療を紹介し、各技術の利点や新規性を整理し、今後論文として海外に発信するための議論を行うことで、日本が世界の補綴歯科臨床をリードする可能性について展望したい。

[ES2-1] イブニングセッション2

*岩内 洋太郎¹ (1. 昭和医科大学歯学部 歯科補綴学講座)

**[ES2-2] デジタル技術を基盤とした補綴歯科治療テクニック
～繋ごう、症例報告へ～**

*近藤 威¹、*今井 実喜生²、*岩内 洋太郎³ (1. 東北大学大学院歯学研究科、2. 九州大学歯学研究院、3. 昭和医科大学歯学部)

[ES2-3] イブニングセッション2

*今井 実喜生^{1,2} (1. リベ大デンタルクリニック、2. 九州大学)

イブニングセッション

2026年6月19日(金) 17:00 ~ 18:00 | 第2会場 (ウイंकあいち 6F 展示場604+605)

イブニングセッション2 デジタル技術を基盤とした補綴歯科治療テクニック〜繋ごう、症例報告へ〜

コーディネーター：近藤 威（東北大）

[ES2-1] イブニングセッション2

*岩内 洋太郎¹ (1. 昭和医科大学歯学部 歯科補綴学講座)

補綴歯科領域においてデジタル技術の臨床応用は急速に進展しており、口腔内スキャナー (IOS) を基盤としたデジタルワークフローは日常臨床において広く普及しつつある。とくにクラウン・ブリッジ補綴においては、IOSを基盤としたCAD/CAM補綴装置製作が一般化し、作業効率や再現性の向上が多く論文で報告されている。一方で、補綴装置の機能的完成度を左右する咬合関係の再現については、依然として半調節性咬合器やチェックバイトを用いたアナログ的手法が広く用いられているのが現状である。近年、一部のIOSには下顎運動をリアルタイムに記録可能な顎運動キャプチャ機能が搭載され、咬合接触や滑走運動の軌跡をチェアサイドで直接取得することが可能となってきた。この技術は、従来必要とされてきた咬合器装着やチェックバイト採得などの煩雑な手順を簡略化しつつ、患者固有の機能運動を補綴装置設計へ反映できる可能性を有している。本発表では、クラウン・ブリッジ製作においてIOSの顎運動キャプチャ機能を活用した臨床症例を提示し、デジタルワークフローにおける咬合情報取得の実際について紹介する。また、演者らの研究グループがこれまで報告してきた顎間関係記録再現に関する研究成果を踏まえ、再現精度に関するエビデンスと臨床応用上の留意点について整理する。これらを通じて、IOSを用いた顎運動情報の活用がクラウン・ブリッジ補綴の製作過程にどのような臨床的意義をもたらすかについて、症例を通して報告する。

イブニングセッション

2026年6月19日(金) 17:00～18:00 | 第2会場 (ウイंकあいち 6F 展示場604+605)

イブニングセッション2 デジタル技術を基盤とした補綴歯科治療テクニック～繋ごう、症例報告へ～

コーディネーター：近藤 威（東北大）

[ES2-2] デジタル技術を基盤とした補綴歯科治療テクニック
～繋ごう、症例報告へ～

*近藤 威¹、*今井 実喜生²、*岩内 洋太郎³ (1. 東北大学大学院歯学研究科、2. 九州大学歯学研究院、3. 昭和医科大学歯学部)

キーワード：デジタルデンティストリー、新たな補綴歯科治療技術、症例報告

デジタル技術の進展により、補綴歯科治療は大きく変化し、光学印象、CAD/CAM、3Dプリンターを用いた様々な補綴歯科治療技術が各国から報告されている。一方、今後日本の補綴歯科臨床を発展させるためには、日本人補綴歯科医が臨床で得られた知見や技術を積極的に論文化し、国際的に発信していくことが重要である。

発表者らは、患者特性に応じてデジタルとアナログを融合させた補綴歯科治療技術に着目し、国際誌における症例報告を通じて、日本発の補綴歯科臨床の有用性を世界に向けて発信してきた。特に、高齢者では咬合再構成により顎間関係が変化する治療において、神経筋調和の観点から新たな補綴装置に上手く適応できない場合がある。そのため、確立された顎間関係を最終補綴装置へ正確に移行することが重要となる。発表者らはこの点に着目し、デジタル技術を活用して既存の顎間関係を正確に維持した最終補綴装置の製作手法の確立を試みた。また、すべての補綴歯科治療をデジタルのみで完結させることの難しさを踏まえ、デジタルの利点を活かしつつ、その限界をアナログ技術で補完する新たな補綴歯科治療技術の開発にも取り組んできた。

本発表では、モノリシックジルコニアブリッジとテレスコープクラウンを組み合わせた症例や3Dプリンターによる複製部分床義歯を応用した新たな義歯製作方法に関する症例を紹介する。さらに、日常臨床を論文として発信するためのコンセプト設定や新規性の整理について考察し、臨床から得られる知見を世界へ発信していくことの重要性について議論する。

イブニングセッション

2026年6月19日(金) 17:00 ~ 18:00 | 第2会場 (ウインクあいち 6F 展示場604+605)

イブニングセッション2 デジタル技術を基盤とした補綴歯科治療テクニック〜繋ごう、症例報告へ〜

コーディネーター：近藤 威 (東北大)

[ES2-3] イブニングセッション2

*今井 実喜生^{1,2} (1. リベ大デンタルクリニック、2. 九州大学)

インプラント治療においてデジタル技術の臨床応用は急速に進展しており、資料採得、診査診断、治療計画、および補綴装置製作といった一連のプロセスにおいて大きな役割を担っている。とくに口腔内スキャナー (IOS) やコーンビームCT (CBCT) のデータ活用、さらにはCAD/CAM技術を基盤としたデジタルワークフローは広く普及し、作業効率や再現性の向上が報告されている。

実際の臨床において、患者固有の複雑な口腔内環境の把握や機能的要件の再現は、従来のアナログ技術のみでは正確な情報の取得や移行が困難な場面も存在した。しかし、デジタル技術を応用することで、これまで困難であった精緻な生体情報の可視化や共有が可能となってきた。これらデジタル技術の恩恵に、アナログ技術を適切に融合させることにより、これまで以上の成果が出ている。

本発表では、演者らの研究グループがこれまで報告してきたデジタル技術に関する研究の成果を踏まえ、各種デジタルワークフローの再現精度に関するエビデンスと、臨床応用上の留意点について整理する。さらに、実際の臨床症例を提示し、デジタルとアナログの融合が今後のインプラント補綴の製作過程にどのような臨床的意義をもたらすかについて報告する。

イブニングセッション

■ 2026年6月19日(金) 17:00 ~ 18:00 | Ⅲ 第3会場 (ウインクあいち 5F 小ホール1)

イブニングセッション3 咬合が支える身体機能—ライフコース（小児・青年・高齢期）の視点から—

コーディネーター：大木 郷資（九州大）

近年の歯科医療では、疾患治療中心の枠組みだけでなく、口腔機能の維持・向上を重視する健康管理の方向へと政策・臨床の双方で転換が進んでいる。本セッションでは、この潮流を背景にポジティブヘルスという概念を導入し、口腔機能が人の活力や生活機能にどのように関与しうるかをライフコースの視点から再考する。特に小児期・青年期・高齢期という3つのライフステージの視点から、咬合と身体機能の関係を多角的に捉え、生涯にわたりポジティブヘルスにつながる身体機能を支える咬合管理の意義について議論する。

[ES3-1] イブニングセッション3

*田邊 元¹ (1. 明海大学 歯学部 スポーツ歯学分野)

[ES3-2] イブニングセッション3

*芳賀 秀郷^{1,2,3} (1. 昭和医科大学歯学部歯科矯正学講座、2. 昭和医科大学スポーツ運動科学研究所、3. 昭和医科大学歯科病院 スポーツ歯科外来)

[ES3-3] 咬合が支える身体機能—ライフコース（小児・青年・高齢期）の視点から—

*大木 郷資¹、*田邊 元²、*芳賀 秀郷³ (1. 九州大学歯学研究院口腔機能修復学講座クラウンブリッジ補綴学分野、2. 明海大学 スポーツ歯学分野、3. 昭和医科大学 歯学部歯科矯正学講座)

イブニングセッション

2026年6月19日(金) 17:00 ~ 18:00 | 第3会場 (ウイंकあいち 5F 小ホール1)

イブニングセッション3 咬合が支える身体機能—ライフコース (小児・青年・高齢期) の視点から—

コーディネーター：大木 郷資 (九州大)

[ES3-1] イブニングセッション3

*田邊 元¹ (1. 明海大学 歯学部 スポーツ歯学分野)

まず総論として、「ポジティブヘルス」を身体・心理・社会機能が統合されたレジリエンスを備えた活力ある状態として位置づけ、口腔機能との関係を概念的に整理する。特に、口腔は咀嚼、咬合、感覚入力を担う器官として、栄養摂取のみならず神経筋制御や身体機能、さらには粘膜免疫とも関連する点に着目する。続いてライフコースにおける青年期に焦点を当て、スポーツや身体活動の場面において咬合や口腔機能が身体機能やパフォーマンスにどのように関与し得るかについて、これまでの研究知見を概説する。具体的には、咬合状態が姿勢制御、筋出力、バランス等に影響を及ぼす可能性や、三叉神経系を介した感覚入力が神経筋機能に与える影響について整理する。また、マウスガードの装着が安全性のみならずパフォーマンスに与える影響についても整理する。これらを踏まえ、スポーツ歯科の視点から口腔機能と身体パフォーマンスとの関係を統合的に捉え、口腔が人の活力に果たし得る役割について考察する。

イブニングセッション

2026年6月19日(金) 17:00 ~ 18:00 | 第3会場 (ウイंकあいち 5F 小ホール1)

イブニングセッション3 咬合が支える身体機能—ライフコース (小児・青年・高齢期) の視点から—

コーディネーター：大木 郷資 (九州大)

[ES3-2] イブニングセッション3

*芳賀 秀郷^{1,2,3} (1. 昭和医科大学歯学部歯科矯正学講座、2. 昭和医科大学スポーツ運動科学研究所、3. 昭和医科大学歯科病院 スポーツ歯科外来)

小児期の咬合は、歯列および顎顔面形態の形成に加え、口腔機能を介して全身機能と関連する重要な要素である。また成長発育期は顎顔面と全身の発達が著しい時期であり、不正咬合は美的不調和の問題にとどまらず、咀嚼、嚥下、呼吸といった機能や心理社会的健康に影響を及ぼす可能性がある。とくに咀嚼機能は食行動の形成に関与し、栄養摂取様式や身体発育を介して、将来的な身体機能の基盤形成に寄与すると考えられる。近年、顎顔面形態や咬合は上気道機能や睡眠呼吸障害との関連が指摘されており、運動時の呼吸効率やパフォーマンスとの関係も注目されている。一方で、姿勢制御や運動機能との関連については一定の関連が示唆されるものの、因果関係の解釈には慎重を要する。これらの知見は、成長期における口腔機能の獲得や咬合管理が単なる歯列の整列にとどまらず、将来的な身体機能およびスポーツパフォーマンスの基盤形成に関与し得る可能性を示唆する。本セッションでは、小児期における咬合と身体機能の関連について、口腔機能、呼吸機能および運動機能の観点から整理し、スポーツ歯科学的視点も盛り込みながら臨床的意義と実践的示唆について考察したい。

イブニングセッション

2026年6月19日(金) 17:00 ~ 18:00 | 第3会場 (ウインクあいち 5F 小ホール1)

イブニングセッション3 咬合が支える身体機能—ライフコース (小児・青年・高齢期) の視点から—

コーディネーター：大木 郷資 (九州大)

[ES3-3] 咬合が支える身体機能—ライフコース (小児・青年・高齢期) の視点から—

*大木 郷資¹、*田邊 元²、*芳賀 秀郷³ (1. 九州大学歯学研究院口腔機能修復学講座クラウンブリッジ補綴学分野、2. 明海大学 スポーツ歯学分野、3. 昭和医科大学 歯学部歯科矯正学講座)

キーワード：咬合、身体機能、ポジティブヘルス

超高齢社会を迎えた我が国において、健康寿命の延伸は重要な医学的課題である。転倒は骨折などを契機として寝たきりに至る可能性があり、その予防は高齢者の生活機能維持の観点から重要である。転倒の要因の一つにつまづきが挙げられ、これは筋力や柔軟性の低下、さらにバランス能力の低下が影響すると考えられている。したがって、筋力およびバランス能力を維持することは、平均寿命と健康寿命の差を小さくすることに寄与すると考えられる。これまで、咬合と身体平衡機能の関連性に関して多数の報告がなされているが、各研究で用いられる全身機能の評価項目は必ずしも一致していない。そこで我々は、下肢筋力およびバランス能力を総合的に評価できる身体機能指標であり、フレイルや転倒リスク評価の重要な指標でもある起立動作能力に着目し、咬合および補綴治療が起立動作能力に与える影響について調査してきた。その結果、臼歯部咬合支持の重要性と、欠損患者に対する補綴治療の必要性を明らかにしてきた。これらの知見は、補綴治療の意義を口腔機能の回復にとどまらず、全身機能の維持という観点から再評価できる可能性を示している。すなわち、口腔機能を単なる咀嚼機能として捉えるのではなく、人の活力や生活機能を支える要素として理解する必要性を示唆している。本セッションでは、高齢者における咬合および補綴治療と身体機能の関係について、起立動作能力といった身体機能評価を踏まえて紹介し、高齢期における活力ある生活を支える観点から補綴治療の意義について考察する。

イブニングセッション**■** 2026年6月19日(金) 17:00 ~ 18:00 | **■** 第4会場 (ウインクあいち 5F 小ホール2)**イブニングセッション4 検証する！ドイツRBFDPsは次世代の補綴装置となり得るのか？**

コーディネーター：大川 友成（九州大）

本セッションでは、ドイツで発展した低侵襲な次世代補綴装置「RBFDPs」に焦点を当てる。エナメル質性状の異なる日本人への有用性検証は、国内の臨床認知を広げ、新たな治療としてRBFDPsが構築していく上で不可欠である。日本人への適用症例の詳細な検証を通じて新たな治療概念の論拠を提示し、今後のトランスレーショナルリサーチの方向性について深く議論するとともに、次世代補綴の可能性をこのイブニングセッションにて問題提起していく。

[ES4-1] イブニングセッション4*長嶺 憲作¹ (1. 東北・北海道支部)**[ES4-2] イブニングセッション4***寺尾 陽一¹ (1. 東海支部)**[ES4-3] イブニングセッション4***森 圭右¹ (1. 東海支部)

イブニングセッション

2026年6月19日(金) 17:00 ~ 18:00 | 第4会場 (ウインクあいち 5F 小ホール2)

イブニングセッション4 検証する！ドイツRBFDPsは次世代の補綴装置となり得るのか？

コーディネーター：大川 友成 (九州大)

| [ES4-1] イブニングセッション4

*長嶺 憲作¹ (1. 東北・北海道支部)

15歳女性の犬歯1歯欠損に対して、RBFDPsを臨床応用した。初めて取り組んだRBFDPs症例である。

当初、従来型ブリッジによる治療を提案したが、健全歯質の削合量の多さと歯髄への悪影響から患者とその家族から拒否された。比較的削合量の少ない接着ブリッジは、脱離等の問題により予後に不安が残る可能性が高い¹⁾。

われわれは、低侵襲で審美回復可能な補綴装置であるドイツRBFDPsを応用することとした。ただし、RBFDPsは前歯部支台歯における良好な臨床成績を示しているが²⁾、小臼歯を支台歯とした症例報告は極めて少なく、十分な検証は報告されていない。

そこで、これまでドイツRBFDPsの前歯部に対する治療方法³⁾に新たなアイデアを加えて治療を行った結果、その患者と家族は審美的に高い満足度を示し、術後2年の経過においてもその審美性は維持されている。

日本におけるRBFDPsの臨床認知を広げ、今後のエビデンスの集積および検証につなげることを目的に小臼歯を支台歯としたRBFDPs症例を通じて、臼歯部へのRBFDPs適用の可能性とその具体的な方法について議論したい。

文献

- 1) 矢谷博文. メタルフレームを用いたカンチレバーブリッジの生存率と合併症：文献的レビュー. 日補綴誌2019；11：193-205.
- 2) Kern M. Türp L. Yazigi C. Long-term outcome of anterior cantilever Zirconia ceramic resin-bonded fixed dental prostheses: Influence of the pontic location. J Prosthet Dent2025；133：1018-1023.
- 3) Kern M. Warum die Schneidezahn-Adhäsivbrücke einflügelig und in Deutschland Regelversorgung wurde. Quintessenz 2017；68(7)：777-789.

イブニングセッション

2026年6月19日(金) 17:00 ~ 18:00 | 第4会場 (ウイंकあいち 5F 小ホール2)

イブニングセッション4 検証する！ドイツRBFDPsは次世代の補綴装置となり得るのか？

コーディネーター：大川 友成（九州大）

| [ES4-2] イブニングセッション4

*寺尾 陽一¹ (1. 東海支部)

近年、少数歯欠損に対する補綴治療として、インプラント治療が第一選択とされることが多い。しかしながら、われわれはすべての症例においてインプラント治療が最適な治療とは言えないと考えている。なぜならインプラント治療は粘膜を貫通する構造を有するため、周囲組織の健康状態を含めた長期的な生物学的評価が重要となる。また、インプラント治療の有効性は広く報告されている一方で、基礎研究に基づいた実用化の完遂には至っていない。

こうした背景の中、天然歯を応用する補綴治療の再評価も重要と考えられる。ドイツを中心に発展してきたRBFDPsは、ヨーロッパのインプラント関連学会において少数歯欠損に対する新たな治療選択肢として脚光を浴びている。ドイツRBFDPsの報告では症例数の少ない下顎前歯部2歯連続欠損に対する症例を提示する。初学者である演者がKernらの提唱する設計コンセプトを遵守しつつ、設計上の創造的アイデアを加えてRBFDPsを適用した。装着後2年を経過した現在も、審美的に良好な経過を示している。Kernらが長年取り組んできたRBFDPsは、現在われわれの臨床においても応用され良好な結果が得られている。一方、日本における基礎研究は未だ十分とは言えない。

RBFDPsを日本における次世代の補綴装置として位置付けるためには、臨床から基礎研究へとつなげるTranslational Research（橋渡し研究）の視点が重要である。本発表を通じて、RBFDPsの可能性と今後の研究課題について議論したい。

イブニングセッション

2026年6月19日(金) 17:00 ~ 18:00 | 第4会場 (ウイंकあいち 5F 小ホール2)

イブニングセッション4 検証する！ドイツRBFDPsは次世代の補綴装置となり得るのか？

コーディネーター：大川 友成 (九州大)

[ES4-3] イブニングセッション4

*森 圭右¹ (1. 東海支部)

Kernらにより確立されたRBFDPsは、口腔インプラント治療と比べて、固定性補綴装置でありながらも生体追従性をもち、最小限の侵襲で高い審美性を獲得できる。そして、海外ではRBFDPsのサバイバルレートが多数報告されており、インプラント治療に代わる欠損補綴歯科治療として特に若年患者に広く適応されている。

日本では欠損に対する審美回復のための固定性補綴装置として、接着ブリッジや保険収載された接着カンチレバー装置の報告はあるが、良好な長期経過のアウトカムは示されていない。それらと一線を画したRBFDPsにおいても、日本人における長期経過を伴う報告はない。一方で、若年者多数歯欠損に対するインプラント治療のアウトカムは報告がない。したがって、われわれは若年者多数歯欠損に対する審美補綴治療は、治療方針の決定に苦慮するのではないかと考えている。

今回、左右2歯ずつ合計4歯の若年者先天性欠如患者に対して、インプラント治療ではなくRBFDPsを適応したことは、日本における新しい試みであるといえる。ドイツにおいても同様の症例にRBFDPsを適応した報告はない。RBFDPs初学者の術者が2カ所の2歯連続欠損をRBFDPsによって審美回復した。術後経過はまだ2年であるが、この成果を出せた要因は、Kernらの術式の遵守と創造的アイデアの適用に他ならない。未だ日本でのエビデンスに乏しい治療法であるが、RBFDPsが日本人にとってより良い補綴歯科治療となるための具体的な研究戦略を導きたい。